

Mの逆上がり

桜台小学校長 小宮 健

初任校での思い出です。

私が教師となって初めて担任した3年生のクラスにM（敬称略）という男子がいた。Mは何に対しても興味を示すが、意欲が持続せず、途中で諦めて「どうせ、僕なんか…」と下を向いていじけてしまうことがよくある子だった。お世辞にも運動能力が高いとはいえない上に体格も影響し、鉄棒が苦手だった。私はそんなMに何とか『逆上がり』ができるようになってほしくて、鉄棒の練習によく付き合っていた。苦手なものを克服して自信をつけさせたかったからだ。

しかし、私の未熟な指導法で繰り返し教えても、Mはなかなかコツをつかむことができず、結局私が担任した1年の間に『逆上がり』ができるようにはならなかった。

ある日の午後、確か出張に行くために校門近くの鉄棒の前を通りかかると、進級した4年生の男子数名が鉄棒で遊んでいた。「先生、見て！」と体育で学習した新しい技を自慢げに披露し合う活発な子たちに「すごいなあ。うまくなったね」と声をかけ、通り過ぎようとしたとき、鉄棒を握りながら友達の様子を羨ましそうに眺めているMの姿が目に入った。

私は何気なく「Mは『逆上がり』だよな」と話しかけた。言葉を言い放ったあとに私はハッとした。おそらくその言葉をMは「お前はまだ『逆上がり』だよな」と言われたと感じたのだろう。Mの表情が一瞬にして怒りへと変わった。『逆上がり』で悪かったなあ！——どうせオレはまだ『逆上がり』ですよ」と吐き捨てるように言った。そこには悔しさが滲み出ている。

それからのやり取りは今でも鮮明に覚えている。

（何てことを言ってしまったのだ。大人気ない。謝らなくては…）と心の中で呟く自分の気持ちとは裏腹に、返した言葉は「悔しかったらやってみろよ！」と追い打ちをかけるような配慮の欠片もないものであった。

その瞬間、Mの中で何かが弾けたのだろう。興奮したMは間髪入れずに「やってやるよ！」と怒鳴ってきた。私ももう後には引けず、「おう、やってみろよ！！」と真顔で言い返す。そして、Mは感情の高まりを抑えきれないまま、一心不乱に地面を強く蹴り上げた。すると、その足に引き上げられるかのように腰が宙に浮き、体が鉄棒を巻き込むように一回転したのだ。

M自身が一番驚いたのかもしれない。一瞬、間をあけて「やったー！！できた！」とつぶらな瞳を真ん丸に見開いたMの顔を忘れることができない。それまでの険悪な空気はどこかに吹っ飛び、私たちは手を取り合って喜び、「Mが『逆上がり』できたぞ！」と周りの子たちからも拍手が起った。

後日、担任から「Mは『逆上がり』ができたことを本当に喜んで、何に対しても前向きになってきた」と伝えられたが、私がMに発した言葉は、教師として最低の投げかけだったと猛省した。もし、あの時『逆上がり』ができていなかったら…。

そんな自分をどうしても許すことができず、自戒の念を込めて、尊敬する先輩のK先生にMとの出来事を話してみた。すると、K先生は私を責めもせず、「小宮さんは『本気でかかわった』んだと思う。鉄棒の前を素通りしていたら何も起こらなかった。少なくとも背中を押してあげたんだよ。教師は『本気でかかわること』が大切なんだ」と仰ってくれた。私はその言葉に救われた。ただ、今でもMに対して「申し訳なかった」と心に何か引っ掛かったままなのも事実だ。あれから30年ほどの月日が流れたが、Mが私に教えてくれたことを忘れたことはない。

この『Mの逆上がり』が私の教師としての原点である。

すべての教科学習に基礎・基本があるように、私たち教職員一人一人にも原点や基礎・基本があるのだと思います。コロナ禍で様々な制約がある中、充実した学びの実現が困難な状況ではありますが、桜台小学校の教職員それぞれの原点に根差した思いを結集して、心豊かな子どもたちが育つ学校を目指し頑張っています。